



Title	農産物市場の展開と商業資本
Author(s)	三国, 英実; MIKUNI, Hidemi
Citation	北海道大学農経論叢, 28, 111-152
Issue Date	1972-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10882
Type	departmental bulletin paper
File Information	28_p111-152.pdf



農産物市場の展開と商業資本

三 国 英 実

目 次

I 序	111
II 農産物取扱商業資本の段階分化と段階排除	112
1. 問題の所在	112
2. 商業資本の段階分化	113
3. 農産物流通の特質と段階分化	117
4. 商業資本の段階排除	120
5. 農産物取扱商業資本の段階排除	123
III 農産物取扱商業資本の回転と競争	127
1. 問題の所在	127
2. 商業資本の回転と競争	127
3. 農産物取扱商業資本の回転	130
4. 農産物取扱商業資本の競争と集積・集中	135
IV 青果物取扱商業資本の変質過程	139
1. 青果物市場の展開と問屋形態	139
2. 青果物市場の編成と商業資本	142
3. 青果物市場の再編成と商業資本	146
4. 青果物市場再編成政策の性格	150

I 序

高度に発達した独占資本主義のもとで、小農の販売する農産物を取扱う商業資本の性格と機能を分析するのが本論の課題である。いっぽんに商業資本は資本主義の三つの発展段階に照応して、その性格を異にしている。すなわち資本主義の発生期ではいわゆる前期的商業資本として小商品生産を従属させているが、自由主義の段階では産業資本の商品資本が自立化した形態として平均利潤の形成に参加し、独占資本主義の段階では独占資本に従属し、いわゆる手数料商人に転化するものとされている。しかし、独占資本主義のもとにありながら独占資本の商品を取扱うのではなく、小農の販売する農産物を取扱う商業資本のばあい、その手数料商人化がすすむといっても独自の考察を必要とする。

農産物取扱商業資本の特質を考察するにあたって、まず問題となるのは、その段階分化の問題である。すなわち、農産物の収集、仲継、分散の各過程に対応して商業資本が多数介在しているが、これらの段階分化はいかなる根拠にもとづくものか、また、独占資本主義のもとで段階排除が進行するといわれるが、こうした特質をもつ農産物取扱商業資本のばあい、いかなる形で進行するかが分析されなければならない。つぎに、こうした段階分化あるいは段階排除の問題は農産物取扱商業資本の運動、すなわちその回転と競争の問題との関連で考察される必要がある。農産物取扱商業資本といえども、発達した資本主義経済のもとでは資本一般の競争にまきこまれざるをえない。そのばあい、とくに独占資本主義のもとでの農産物取扱商業資本の回転と競争の特質が明らかにされる必要がある。さらに、これらの問題の考察を前提として、農産物取扱商業資本の性格を明らかにする必要がある。とくに、農産物取扱商業資本が独占資本主義のもとで手数料商人化されるというばあいのメカニズムが検討されなければならない。

本論では、これらの問題のうち、農産物取扱商業資本の段階排除と段階分化の問題およびその回転と競争の問題をとりあげ、農産物取扱商業資本の手数料商人化の問題は別稿にゆずる。なお、本論では、農産物取扱商業資本に関するこれらの一般的な考察にもとづいて、より具体的にわが国における青果物取扱商業資本の性格と機能の変質過程を総括し、とくに今日の青果物市場再編成政策の意味を検討する。

II 農産物取扱商業資本の段階分化と段階排除

1. 問題の所在

農産物の流通機構の複雑性は、その流通形態が多様であるためばかりでなく農産物の流通過程における商業資本の多段階的介在によるものであることはしばしば指摘されている。すなわち、農産物流通の特質として収集、仲継、分散の各過程を必要とし、それらの諸機能に対応して農産物取扱商業資本が多数存立している。農産物流通のこの特質は、独占資本主義のもとでも基本的に払拭

1) 「農業経済研究」第35巻、第1号、1~7ページ、1971年4月、岩波書店。

1) 農産物の収集・仲継・分散の各過程に介在する商業資本の諸機能については、つぎの著書を参照。

川村琢著『農産物の商品化構造』三笠書房、昭和35年、103ページ~107ページ。
御園高博著『農産物市場論』東大出版会、1966年、36ページ。

されえない。

ここでの問題は、まず農産物の流通過程において、農産物取扱商業資本が収集・仲継・分散の各段階に分化、自立化する根拠を明らかにし、つぎに独占資本主義のもとでは一般に商業資本の段階短縮と商業資本の排除がすすむといわれるが、農産物取扱商業資本のばあいは、どのような特質をもって現われ、その条件は何かを検討することである。

これまで、農産物取扱商業資本のばあいも、独占資本主義あるいは国家独占資本主義のもとでは、その合理化と段階排除が直接進行するものと、理解されることが多かった。しかし、現実の農産物市場の展開過程をみると、国家独占資本主義のもとでも、一方では農産物取扱商業資本の段階縮小の進行もみられるが、他方ではまたあらたに段階分化の進展する傾向もみられるのである。こうした現実の複雑な過程を正しく分析するためには、独占資本主義のもとでの商業資本の合理化・段階排除を問題にするまえに商業資本の段階分化論を農産物流通の分析に必要な限りにおいてまず整理し、つぎに農産物取扱商業資本のばあい、その段階分化がどのような特殊性をもって現われるか、その根拠を示し、最後に独占資本主義のもとで、農産物の流通過程における商業資本の合理化と段階排除の特質を明らかにしなければならない。

2. 商業資本の段階分化

マルクスの『資本論』第3巻、第4編での商品取扱資本の分析は「資本の核心的構造の分析に必要なかぎり」に限定され、それはあくまでも産業資本の再生産過程の一段階をなすにすぎない商品資本の貨幣資本への転化の過程が、資本家の特殊な種類である商品取扱業者の専門の操作として現われ、一つの特殊な投資に属する営業として独立させられたものとして分析している。そして、これによって、元来は産業資本の再生産過程の特殊な一段階でなされるべき機能の一部分が、生産者とは別な特別な流通担当者の専有機能として現われるのであり、このことは社会的分業の発展の特殊な一形態を示すものである。そしてマルクスはこの商業資本自立化の根拠として、つぎの三点をあげている。すなわち、(1) 分業の結果として、もっぱら売買だけに従事する資本は、仮りに産業資本が自分の業務の商業的部分も全部自分で営まなければならないとした場合に比べてより小さいということ。(2) 商人が専門にこの業務に従事するので、生産者にとって自分の商品がより速く貨幣に転化されるだけでなく、商

品資本そのものがその変態を、生産者の手のなかでする場合よりも、より速くすませるといふこと、(3) 商人資本全体を産業資本と対比して見れば、商人資本の一回転は、一つの生産部面にある多数の資本の回転を表わすだけではなく、いろいろな生産部面にあるいくつもの資本の回転をも表わすことができる¹⁾といふことである。そして、このことによつて、商業資本は直接には価値も剰余価値も創造しないのであるが、それは間接には、産業資本の生産する剰余価値をふやすことを助けることができるのである。すなわち、商人資本が市場の拡張を助け資本家たちのあいだの分業を媒介し、したがつて資本がより大きな規模で仕事をすることを可能にするかぎりでは、その機能は産業資本の生産性とその蓄積を促進し、商人資本が流通期間を短縮する限りでは、それは前貸資本に対する剰余価値の割合、つまり利潤率を高くし、商人資本が資本のよりわずかな部分を貨幣資本として流通部面に閉じこめておくかぎりでは、それは資本のうち直接に生産に充用される部分を増大させ、したがつて剰余価値を増加するのである²⁾。

『資本論』では、このように産業資本の一形態である商品資本の機能の一部分を専門的に分担するものとして自立化した商業資本の運動を、一体として、「資本の核心構造の分析に必要な限り」という前提のもとで研究している。したがつて、商業資本の専門的、あるいは段階的分化の問題、商業資本の諸形態とその運動などの特殊的研究は行なわれていない。したがつて、ここで問題にしようとする商業資本の段階分化についても、その特殊な考察が必要となる。商業資本の段階分化あるいは商業介入 (Handelseinschaltungs) を問題にするばあい、この傾向を示したシェーア (J. F. Schär) の図がしばしばもち出される³⁾。それを示せば、第 1 図の如くである。すなわち、第 1 段階は自給自足の経済組織であつてそこには商業は存在しない。第 2 段階は生産者と消費者とが分離し対立する経済組織であつて、剰余生産物についての直接的交換が行われるけれども、まだ両者の中間に介在する商業は発生しない。第 3 段階に進んではじめて生産者と消費者との間に交換を媒介する商業が発生する。これによつて市場経済組織はいちだんと進展する。第 4 段階は、介入した商業が二種に分

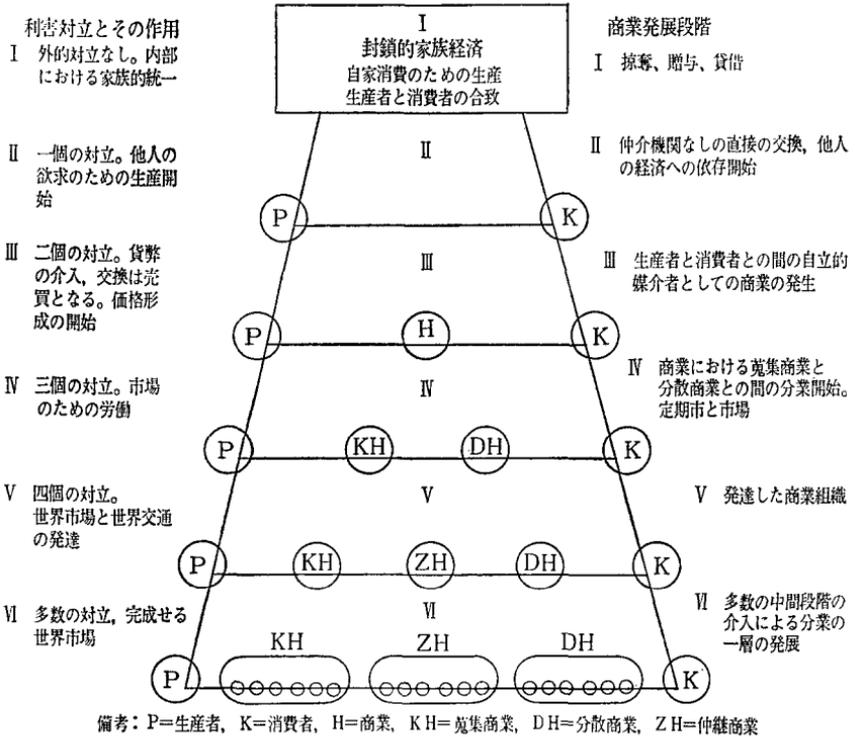
1) マルクス『資本論』大月書店、M・I 全集第 25 a 巻、345～346 頁。

2) 『資本論』351 頁。

3) J. F. Schär “Handels - Betriebslehre” I. 186 ページ。

農産物市場の展開と商業資本

第1図 商業資本の段階分化の傾向



森下二次也『現代商業経済論』より引用

化して、収集商業 (Kollektierender Handel) と分散商業 (Distribuiorender Handel) とに分かれる。第5段階では、商業の分化がさらに進行して収集商業と分散商業との間に仲継商業 (Zwischen handel) が介入する。第6段階では、収集、仲継、分散の各段階でさらに細分化が進行すると説明されている。

このシェアの図とその説明に対して、森下二次也氏は、これを批判し、まず、シェアの図で、このような発展段階のうちどれが資本主義社会に属するものであるか明示していないこと、この段階分化の形式的に一貫性からただちに資本主義社会における商業資本分化の必然性は説明することはできないとしている。また、シェアが、こうした商業の段階分化の原因を、商業利潤が不断の利害対立の増大、すなわち流通過程の新たな中間段階の介入を刺戟することによ

るとして、もっぱら商業利潤の存在に帰していることに対してこれは段階形成の具体的過程の説明であって、形成の理由を示すものではないとしている。⁴⁾

そして、森下氏はこのシェアの残した問題の解明を一步進めたものとしてホルの研究を上げている。すなわち彼女が卸売商業の存在理由として、第1に取引総数最小化の原理、第2に不安定平均化の原則をあげていることに対して、第2の原理は商業分化の根拠を示すものとして採用できないとし、第1の取引総数最小化の原理を商業分化の根拠として重視している。ただ、ホルの指摘する商業分化による取引数の減少は、商人への売買の集中をはなれてはありえず、それは売買集中の結果であるとしている。そして、この商業資本による売買の集中、その結果としての取引数の減少は、ホルのいうように特に卸売商業の介入にのみ固有なものではなく、すべての商業介入についていいうることであると批判している。

そこで、森下氏の商業資本の具体的な段階分化の根拠の説明を要約すると次のとおりである。まず、商業資本の大規模化は、社会的総資本の要求であり、それは商業資本自立化の必然の延長として必然的に要求される。ところが、商業資本にとってのこの必然の要求が、産業資本と消費者との間に一段階の商業しか介在しない条件のもとでは、すくなくとも消費財の商業資本にとっては、十分に貫徹されえない。すなわち、一般に個人的消費者に商品を販売する商業資本は小規模分散的とならざるをえない。しかも、消費の個別性を反映して、なお強く商品の使用価値からの制約を受けるので、商業資本自立化の意味がうすれてしまう。ここに、小売商業資本と卸売商業資本の分化は、消費財の商業資本の基本形態である小売商業資本の小売資本としてもつ要求と商業資本としてもつ要求との内面的矛盾の、外部的な展開として把握される。そのばあい、卸売商業資本の分化は、そこに新たにそれだけの商業資本が産業資本から追加されると考えるべきではなく、小売商業資本としてすでに自立化した商業資本の一部が卸売商業としてプールされたものとみるべきで、それによって全体として商業資本はかえって節約されるものとみるべきであるとしている。

さらに卸売商業資本内部における細分化についてであるが、このばあい分散卸売商業資本と仲継卸売商業資本との分化については、小売商業資本から卸売商業資本が分化するのと同じ論理、すなわち分散卸売商業資本の分散卸売商業

4) 森下二次也著『現代商業経済論』140ページ、有斐閣 1960年。

資本としての性格あるいは要求と、商業資本としての性格あるいは要求との矛盾の展開として把握される。しかし、仲継卸売商業資本と蒐集卸売商業資本との分化については、別個の考察が必要であるとし、これは純粋に資本主義的関係の支配するところでは存在することのできない形態であるとしている。すなわち、現実の資本主義社会には、非資本主義的要素が含まれており、この非資本主義的要素を資本主義的關係に包摂するためにかかる形態が実際上必要となり、総資本の要求する商業資本節約に役立つかぎりにおいて資本主義的合理性が認められるものとして把握される。すなわち、大規模商業資本が多数に散在する小規模商品生産者と取引をむすぶことになると、当然商業資本の必要量はきわめて莫大なものとならなければならない。この不利な結果を免れる方向として、蒐集卸売商業資本が成立する。以上のように、産業資本——仲継卸売商業資本——分散卸売商業資本——小売商業資本の關係が資本主義的関係の展開であるのに対して、仲継卸売商業資本——蒐集卸売商業資本——生産者の關係にはなお多分に前資本主義的なものが残存していると整理されている⁵⁾。

3. 農産物流通の特質と段階分化

さきにもたように産業資本の商品を取扱う商業資本の段階分化は、産業資本—仲継卸売商業資本—分散卸売商業資本—小売商業資本という関係において展開する。しかし、現実の資本主義社会では、まだ、資本主義化されない多数の単純商品生産者が残存しており、かれらが生産する商品をも資本主義的な再生産構造に包摂するためには、商業資本の段階分化も仲継卸売商業資本—収集卸売商業資本—生産者という逆の關係での展開が必要であった。

独占資本主義のもとにありながら、なお、小農生産が広汎に存在しているばあい農産物の流過程において収集、仲継、分散の各過程を必要とし、これらの各過程での機能に対応して農産物取扱商業資本も多段階的に介在することは一般に知られている。シェアの図示した商業資本の段階分化が最も発達した形態が今日の農産物取扱商業資本の段階分化において、もっとも典型的に示されている。ここで農産物取扱商業資本のばあいも仲継卸売商業資本から小売商業資本までの段階分化は、産業資本の生産する消費手段を取扱う商業資本の段階分化とまさに共通した特質と論理をもつであろう。農産物の流過程における商業資本の段階分化に対して、とくに特殊な性格を与えるのは、生産者から仲

5) 森下前掲書 147ページ。

継卸売商業資本までの農産物の収集過程にある。しかし、農産物の収集過程にある商業資本ばかりでなく、仲継過程あるいは分散過程にある商業資本といえども、究極的には遅れた小農生産と結びつき、小農の販売する農産物を取扱う限り、産業資本の商品を取扱う商業資本とはちがった特質を多かれ少かれ持っており、それは農業生産が商業的農業として遅れていればいるほどその傾向は強い。

資本主義がまだ初期の段階で、農業ではなお封建的要素を根強く残しているばあい、農産物市場もなお地方分散的である。一般にこの段階でも都市の一定の発展がみられ、産地市場と消費地市場の分離もすすみ、それに応じて産地問屋と消費地問屋が形成される。この状態は、シェアの図では第 4 段階の一形態で、蒐集卸売商業と分散卸売商業資本が成立した段階に対応したものである。資本主義経済が産業資本を確立し、都市への人口の集中がすすみ、農産物市場も地域的に拡大し時間的にも広がり示すようになると、農産物の流通過程にも仲継卸売商業資本の介在が必要となり、それにつれて仲継組織も発達する。この仲継組織は、生鮮食料農産物のばあいは、卸売市場という形態をとりまた、貯蔵性のある穀類のばあいは穀物商品取引所という形態をとることはよく知られている。

前期的な取引関係を強く残している問屋資本による農産物流通にかわって、農産物市場の一定の発展段階で仲継卸売商業資本の成立する条件を、さらに具体的にみると、第 1 に産業資本が一般的に確立し、賃金労働者の都市への集中を基礎に、食料農産物に対する社会的需要が一定の高まりをみせることが必要となる。このばあい、その国の食料の消費構造が、とくに賃労働者階級の所得水準に規制されて、どの段階にあるかによって、個々の農産物の仲継市場の形成のされ方もちがってくるであろう¹⁾。第 2 に、市場の拡大にともなう農産物価格の平準化の進展である。農産物市場の拡大は、一方では商業的農業の発展にもとづくものであり、他方では小売商の専門化とその地位の強化を促進する。これらの発展は、従来の問屋資本による狭い範囲内での取引と矛盾する。かか

1) 川村琢著『農産物の商品化構造』106ページ。福田敬太郎著『市場論』新版、95ページ、105ページ、春秋社版、昭和32年。

2) たとえば、日本においては、米穀の仲継市場は穀物取引所、正米市場として明治中期より広く発展し、ついで青果物の卸売市場が大正末より昭和初期にかけて展開し、食肉市場の仲継市場の形成はさらに遅れて、それが一般化するの戦後の段階である。

る商業的農業の展開、農産物市場の拡大、専門的小売商の発展は、これまで格差の大きかった農産物価格の地域的、時間的、段階的平準化を促進し、地方分散的市場が全国市場に結合されるにつれて、統一的市场価格の形成をもたらす。こうした価格の平準化傾向の進展は、従来の間屋資本による前期的な取引をますます制限するものとなる。第3に、都市への人口の集中と農産物の大量取引の必要性は、卸売商業資本にその回転速度を早める条件を与える。それとともに、卸売業自体もより積極的に商業利潤を取得する方法として、みずからも取引技術の改革を行って、それに対応していかざるをえない。この過程で商業資本の集中化もせまられるとともに、卸売商業資本としてますます近代的な性格をもっていくのである。かくして、農産物を取扱う仲継卸売商業資本の介在と仲継組織の形成は、遅れた生産構造にもとづく農産物市場を資本主義的な再生産構造の一環として組みこんでいくうえで、重要な意味をもつものとなる。

仲継組織の形成と仲継卸売商業資本の運動を通じて、仲継過程への農産物の売買はますます集中する。仲継卸売商業資本は、こうした仲継過程への農産物流通の集中を基礎にして、時間的にも場所的にも分離・分散している農産物の需要と供給の調節と統一的市场価格の設定という社会的機能をはたすのである。

仲継卸売商業資本が都市への人口の集中を基礎に、大規模になればなるほどそれとは比例してすすまない多数の零細な小農生産との間に、収集卸売商業資本の介在とその展開をますます必要ならしめる。³⁾ 仲継卸売商業資本の農産物取扱量と小農の販売する農産物の量との間の開きが大きくなるほど、収集卸売商業資本内部の商業資本の分化はさらに進展する。この収集卸売商業資本内部の

- 3) 農産物市場の発展にもなる収集過程における商業資本の成立の根拠についてたとえばレーニンは、つぎのように指摘している。「市場がひろがるにしたがって、こういう細分された小規模な販売（細分された小生産に完全に照応している）は、不可能となる。大きな市場では、販売は大規模で、大量的でなければならない。そこで、生産の小規模な性格は、大規模な卸売の必要と和解しえない矛盾に陥る。製品（または原料）を大量に買占め、そうすることによって買占人は販売量を安くし、販売を小規模な、偶然的な、不規則なものから、大規模な規則的なものに転化した。そして、大規模な販売のこの純経済的な優越性の結果として、不可避免的に、小生産者は市場からきりはなされ、商業資本の権力のまえに無防備の状態におかれることになった。こうして、商品経済という環境のもとでは、小生産者は、細分された小規模な販売に対する大規模な大量の販売の、純経済的な、優越性のために、不可避免的に、商業資本に依存するようになるのである。」（レーニン『ロシアにおける資本主義の発達』大月書房、全集、368～369頁）

分化の形態は農産物の種類のちがいによって様々な名称で呼ばれている。また個人的消費者に直接農産物を販売する小売商業資本は、個人的消費に固有の小規模性、分散性、個別性によって規制され、その規模もいっばんに小規模とならざるをえない。とくに、農産物の食料としての個人的消費は、個人的消費の単位は世帯であり、その購買も必要に応じて小量づつ、しかも頻繁に買ういわゆる当用買いが普通である。従って、農産物を取扱う小売商業資本は、とくに小規模で分散的となる。都市への人口の集中が顕著なところでは、この小規模で分散的な小売商と仲継卸売商業資本との間に分散卸売商業資本が介在する。こうして、農産物流通の収集、仲継、分散の各過程に商業資本の多段階的介在が進行する。また、とくにその収集過程と分散過程に介在する商業資本は、農産物生産と農産物消費の零細性と個別分散性に規制されて、多数で小規模となる。

農産物の流通過程における商業資本の多段階で多数の介在は、独占資本主義のもとでも、農産物取扱商業資本の一般的な特徴である。しかし、農産物取扱商業資本の多段階で多数の介在は、独占資本主義のもとでの、商業資本の一般的な合理化と排除の方向とは矛盾するものである。農産物取扱商業資本といえども、独占資本主義のもとでの合理化の方向をまぬがれるわけにはいかない。しかし、独占資本の商品を取扱うのではない小農の販売する商品を取扱う商業資本のばあいその合理化と段階排除がすすむといっても、それはどのようなかたちで進行するか、これが次に検討すべき問題である。

4. 独占資本主義のもとでの商業資本の段階排除

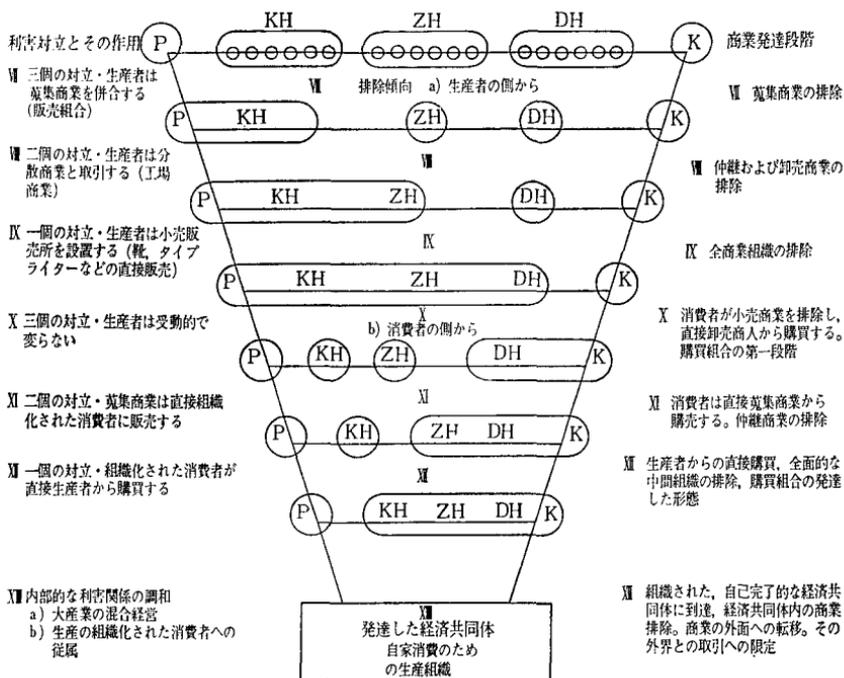
農産物取扱商業資本の段階排除の問題に入る前に、独占資本主義のもとでの商業資本の排除の問題についてその要点だけ指摘しておこう。19C末の独占資本の確立と商業資本の後退という条件のもとで中間商人の排除(Ausschaltung)の方向を形式化するころみながなされたが、その代表者としてアメリカのシェー、ドイツのシェアなどがあげられている。¹⁾ さきに商業資本の介入傾向を示した同じ図で、シェアはその排除の傾向も示しているか、それを示したのが第2図である。²⁾ シェアは、商業の介入傾向は商業費用の社会的負担を増大し、相互の利

1) 森下前掲書、271～277ページ。

2) J. F. Shär “Handels - Betriebslehre” 186ページ。

害対立を生出すため商業の社会的任務と矛盾するものと考えた。この商業介入によって追加される費用は商業によって結合される両極すなわち、生産者と消費者によって負担されなければならないとし、結局、商業排除の傾向も第2図に示すように両極から発するものと考えた。この両極からの商業排除の他に、

第2図 商業資本の段階排除の傾向



森下二次也『現代商業経済論』より引用

シェアは商業資本がその利潤を求めて、商業内部での排除も進むことも指摘している。

シェアが、このように商業資本の排除傾向を包括的、一般的に指摘したが、何故その排除が進行するかというその根拠については「利害関係の対立の除去、その調和の貫徹」という理念的なものにおいていた。とくに、19c末から20c初めにかけての資本主義の構造的変化、すなわち独占資本主義の確立を基礎において解明しなかった。

すでに指摘したように商業資本の介入と段階分化は、資本主義の再生産過程

において、社会的に流通資本を節約するという役割をもつものであった。独占資本主義のもとでは、資本の有機的構成はよりいっそう高まり、生産手段の売買では商業資本を介しない傾向がさらに強まり、自由主義の段階に比べて商業資本がその役割を果しうる部面は相対的にますます限定されている。しかし、独占資本主義のもとでも社会的分業は進行し、新しい商品が開発され、それが多称化するし、生活手段の流通も生産手段に比べれば相対的には減少するが絶対的には増大するし、さらに、農業など、いまだ資本主義化されない分野の商業化の進展など、商業資本はなお多かれ少かれ自立化と段階分化のすすむ根拠をもっているのである。

にもかかわらず、独占資本主義のもとでは、独占資本がその高利潤を確保するために、商業資本を積極的に排除しようとする。この点を理論的に明らかにしたのはヒルファディングである。すなわち、彼によれば、独占的結合と独占価格の設定は商業資本を排除し、商業利潤を奪取する過程を次のように指摘している。「部分的産業結合は、さしあたり商業を減じる。企業連合的結合は、商業操作一般を不要にすることにより直接に商業に減じる。同種の結合は、ちょうど産業一般における集積のような作用をすところ、独占的結合は、商業の独自性をまったく止揚する傾向をもっている。……この(カルテル)法則の内容は、商業からその独自性をうばい、価格設定の作用をとりあげる方向にすすむであろう。だから、カルテル化は、資本の放下部面としての商業を止揚することになる。」³⁾ヒルファディングがカルテル化はたんに商業利潤のみならず、流通費用をも減少させるといっているが、これに対して森下二次也氏は、商業資本の排除はそのまま社会的流通費用の節約をもたらすとはいえないと批判し、その根拠を次のように指摘している。「商業資本自立化の根拠が売買の集中、によるその社会化を基礎として、売買操作の集中、流通資本の共同利用分業による専門化の利益、などにあつた以上、商業資本の自立化の否定による流通費用の膨脹はその逆の形であらわれてくるであろう、ということは容易に推察できる。つまり商業資本の排除によって売買の分散個別化、売買操作の細分重複、流通資本の分裂個別利用、社会的分業の個別的分業への転化がもたらされ、それが費用膨脹を招く原因となるであろう。」⁵⁾独占資本は、工場売り、見

3) ヒルファディング『金融資本論』林要訳、国民文庫、272ページ～273ページ。

4) ヒルファディング、前掲書 374～375ページ。

5) 森下、前掲書 308ページ。

本市、通信販売、販売員による訪問販売、支店および事務所などの諸形態をとって、商業資本を排除するばかりでなく、様々の手段をこうじて商業資本の従属化と系列化もおしすすめる。このばあい、商業資本の排除による商品販売の困難性がともない流通費用は減少するどころか、むしろ加重するのが普通である。それにもかかわらず、独占資本がその方向をたえず追求するのは、そのことによる独占価格の維持と高利潤の確保のためであり、独占資本はむしろその追加的な流通費用を独占価格の中につけ加えることにより、その負担は独占資本が負うのではなく、結局は中小生産者、中小商人、消費者に転化されるのである。

ところで、独占資本主義のもとでの、独占資本による商業資本の排除の傾向はここでみたように独占資本によって独占価格の設定された商品を取扱う商業資本についてではなく、小農の販売する農産物を取扱う商業資本のばあいは、どのようなかたちで進行するであろうか。

5. 農産物取扱商業資本の段階排除

農産物流通の特質は、さきにみたように、その流通過程において収集・仲継・分散の各過程を必要とし、各過程に商業資本が多段階、多数介在することであった。独占資本主義のもとでの商業資本の合理化、段階排除、手数料商人化が進行するなかで、農産物を取扱う商業資本のみがその方向からまぬがれうるわけにはいかない。独占資本はその直接支配下にある商業資本への剰余価値の控除部分縮小するばかりではない。農業生産のように遅れた生産部門と結びつく商業資本に対しても、その遅れた取引を利用しながら、剰余価値の流れを制限し、それを手数料商人化するための措置を講ずる¹⁾。それでは、商業資本の合理化と段階排除といっても農産物取扱商業資本のばあいどのような形をとって進行するかをみていこう。

すでにくりかえし指摘したように、独占資本主義のもとでもなお小農生産が支配的なばあい、農産物の流通過程において収集・仲継・分散の各流通段階を必要とし、各流通段階での機能に応じて商業資本が多数介在するのがいっばん的な姿であった。農産物の流通過程に多数介在するこうした商業資本の合理化と排除は二つの方向をとって進行するであろう。すなわち、その第1は農産物

1) 藤田敬三稿「商業資本の機能変貌の一問題」（村本福松編『商業の展開と問題』有斐閣、1962年、52ページ参照）

流通の各流通段階で商業資本の競争と集中を通じて商業資本の合理化と排除が進展する。第2に、農産物の流通段階は存続しているとしても商業資本が排除されるばあいでは、これは、収集・仲継・分散の各商業資本がそれぞれ他の流通段階の商業資本を排除しうるので様々な形態がありうる。この二つの方向のうち、第2の方向は、第1の方向が進展していることを前提にはじめて可能となるであろう。

まず、第1の方向について考察しよう。農産物の収集・仲継・分散の各過程の中でも収集過程と分散過程にある商業資本は零細で分散的な個別生産と個人消費と結びつくという条件に規制されて、その資本も分散的とならざるをえず、多かれ少かれ前期的取引の可能性が残されている。これに対して、仲継過程にある商業資本は、分散した農産物消費と分散した農産物生産を結合し、農産物消費の恒常性と農産物生産の季節性とを結合するという機能をはたさなければならず、当然そこには農産物売買も集中し、資本じたいの集積・集中もここでは顕著にみられる。資本一般の競争をもっとも強く受ける仲継過程にある商業資本は、その近代的商業資本への転化も他の流通段階にある商業資本よりもはやい。それとともに、農産物流通にともなう危険負担、運送費その他の諸負担をより弱少な収集過程あるいは分散過程にある商業資本に転化し、さらにこれらの弱少な商業資本の合理化を促進する。農産物の仲継過程にある商業資本のこうした集中ばかりでなく、その仲継過程に商業資本を排除して加工資本が介入していくばあいがある。このばあいも加工資本はその合理化のしわよせを分散過程あるいは収集過程にある商業資本に転化するであろう。

農産物の収集過程にある商業資本は、こうした仲継卸売商業資本による合理化の方向に対して、弱小な小農生産からの前期取引の強化によって対応しようとする。しかし、こうした小農からの搾取の強化にはおのずから限界がある。そればかりではなく、農産物の収集過程における商業資本のそうした前期的な取引に対抗して小農みずからが農産物販売組合を組織して、農産物の集・出荷過程に進出する。産地の商業資本に対抗したこの農産物販売組合の組織化と共同販売の展開は、自由主義の段階でもみられるが、独占資本主義のもとではよりいっそう拡大強化する。独占資本主義のもとでは、単に産地の商業資本の前期的取引を排除するという意義にとどまらず、農産物販売組合はまさに独占資本主義のもとでの商業資本の合理化と手数料商人化に対応した形態となるからで

ある。²⁾ 農産物の仲継過程にある集中化した商業資本あるいは加工資本も、農産物の収集過程におけるこうした農産物販売組合との積極的な結合を強化する。農産物販売組合の進出とその拡大強化につれて、収集過程における商業資本の存立基盤はますます弱められ、その存立はしだいに投機的な取引の可能な農産物かあるいはなお前期的取引の可能性を残した地域に制限される。また、農産物販売組合も商業資本の一形態である限り、収集過程にある商業資本ばかりでなく、他の農産物販売組合との競争関係にあり、その規模拡大がせまられる。³⁾ 独占資本主義のもとでは、かくして、農産物販売組合じたいの横断的あるいは従断的結合も高度に進展する。

独占資本主義のもとでの都市人口の集中、仲継卸売商業資本の集中、農産物加工資本の進出と集中、農産物販売組合の拡大強化農産物商品の規格化と標準化の進展という条件のもとで、農産物の分散過程にある商業資本の集中と規模拡大の可能性があたえられる。農産物取扱小売商は専門的小売商の段階から総合食料品店へと発展する過程で従米の家族経営から資本主義経営への転化がみられる。農産物は個々の家庭を単位とする個人的消費にもとづくという性格に規定されて、個々の総合食料品店の大規模化には制限がある。農産物取扱小売商の集中と大規模化は、したがって、こうした総合食料品店を各地に多数所有するという形で展開する。ボランティア・チェーン、スーパー・マーケット、あるいは地域生活協同組合の進展などは、その具体的な形態を示すものである。ところで、これらの小売商の形成と展開も、独占資本主義のもとでの商業資本の合理化の方向に対応したものといえよう。すなわち、独占資本による高利潤の確保と小売商業資本相互間の競争を通じてますます進行する利潤率の低下に対して小売商業資本がより大量の商品を取扱いその回転率を高めることで対応した形態であるといえよう。とくに生活協同組合のばあいは、取得する商業利潤の中から出資金に対する利潤を必ずしも支払う必要がないという条件のもとで独占資本主義のもとでの手数料商人化に対応した形態として存立の根拠が強くあたえられる。

以上の農産物の各流通段階における商業資本の合理化と集中は、国家独占資

2) 川村琢稿「農産物販売組合の性格」鈴木鴻一郎編『マルクス経済学の研究』(下) 455頁、東大出版会、1968年)

3) 農業協同組合の「商業資本」としての機能の強化と規模拡大の問題については、山田定市稿「商業資本と協同組合」参照、(北大農学部『農経論叢』(第25集)

本主義のもとではさらに国家による様々の施策によって政策的にも推進されていることはいうまでもない。次にこうした農産物の各流通段階での合理化と集中を基礎に、各流通段階で機能している商業資本じたいが排除されるという第 2 の方向についてみてみよう。このばあい、収集・仲継・分散の各流通段階のうちどの段階の商業資本がイニシアチブをとって段階排除をすすめるかで三つの形態がありうる。

まず、仲継段階にある大規模な商業資本（あるいは加工資本）が収集過程あるいは分散過程にある商業資本を排除あるいはその系列下におさめ、これらの流通段階を同一の資本のもとに統一していくばあいである。農産物の流通・加工過程に独占資本が直接進出して、農産物の生産から小売までその支配下におさめるいわゆる **Vertical Integration** はこの形態を示すものといえよう。また、農産物の分散過程にある集中化した大規模小売商業資本がその支配下にある多数の小売店舗に対する仲継機能をみずから掌握することにより、仲継卸売商業資本を排除するばあいである。これはたとえば大規模なスーパー・マーケットが、みずから仕入部門を組織することにより、中央卸売市場その他の仲継卸売商業を通さずに、直接収集過程にある商業資本、農産物販売組合と取引するばあいにみられる形態である。仲継卸売商業資本の排除はさらに収集過程にある大規模な農産物販売組合がみずから農産物の仲継過程に進出することによっても進展する。この形態はたとえば、農産物販売組合が、みずから農産物の集配センターを設置することにより、小売商業資本に農産物を直接販売するばあいにみられる。

農産物の各流通段階におけるこれらの商業資本の排除は、独占資本主義のもとでの商業資本の合理化がさらに進行したものである。それは、独占資本主義のもとでの生産力の高度化に対応した高度に組織化された商業資本の姿を示すものであり、社会主義商業への物質的条件の成熟を示すものといえよう。しかし、独占資本主義のもとでの農産物取扱商業資本の集中と段階排除は、農産物の流通过程に介入する多数の零細な商業資本を排除しうるものではなく、独占支配のもとでの農産物取扱商業資本相互間の競争はますます深刻とならざるをえない。

Ⅲ 農産物取扱商業資本の回転と競争

1. 問題の所在

農産物取扱商業資本といえども、資本主義経済のもとでは、その利潤取得の増大をねらって資本一般との競争にまきこまれざるをえない。いうまでもなく商業資本のばあい、産業資本とちがって、その利潤追求のもっとも基本的な条件は、資本の回転速度を速めることである。この商業資本の回転速度それ自体は産業資本の回転、すなわち商業資本の取扱う商品の生産の規模と速度あるいは生産的消費であれ個人的消費であれ、消費の規模と速度に制限されている。農産物取扱商業資本のばあいもその回転は農産物生産と農産物消費の規模と速度に規制されていることにはかわりがない。しかし、農産物生産と農産物消費のもつ特有な性格は、農産物流通の各過程、すなわち、収集・仲継・分散の過程に介在する商業資本の回転と競争にも特有な性格を与えるものと考えられる。この農産物取扱商業資本の回転と競争における特質を解明するのがここでの課題である。この課題に対する考察の順序は、まず第1に商業資本一般の回転と競争について、農産物取扱商業資本を分析するに必要な限りにおいて要約し、第2に、農産物取扱商業資本の回転の特質とその諸条件について考察し、第3に、農産物取扱商業資本が競争を通じてその集積と集中を進めていく特質を検討する。

2. 商業資本の回転と競争

商業資本は、 $G-W-G'$ という運動をたえず繰返している。すなわちその運動は購買 $G-W$ と販売 $W-G'$ という二つの過程からなりたっているのであるが、この循環を孤立したものとしてではなく、たえず繰返される反復の過程としてみると、商業資本の回転と呼ばれる。商業資本の回転を考察するばあい、まず産業資本全体との関連で商業資本全体の回転を問題にし、ついで商業部門の相違による回転が問題になり、さらに同一部門内での個別商業資本の回転を問題にしなければならない。ここでは、これらの問題について要約的にふれておこう。

- 1) 商業資本の回転については、次のものを参照。
 マルクス『資本論』第三部第4編第18章 商人資本の回転、価格。
 森下二次也『現代商業経済論』第6章 商業資本の回転と競争。
 橋本勲『商業資本と流通問題』第1編第3章 商業資本の回転、ミネルヴァ書房
 1970年11月。

まず、商業資本全体の回転の特徴をみると、それは産業資本の回転に制限されていることである。すなわち「商品取引資本の回転の繰り返しは、けっして買っては売ることの繰り返し以外のものを表わしてはいない。他方、産業資本の回転の繰り返しは、総再生産過程（それには消費過程も含まれる）の周期性と更新とを表わしている。ところが、これは商人資本にとってはただ外的条件として現われるだけである。商人資本の速い回転が引き続き可能であるためには、産業資本は絶えず商品を市場に投げ入れ再びそれを市場から引きあげなければならない。再生産過程一般がおそければ、商人資本の回転もおそい。商人資本は生産的資本の回転を媒介はするが、それはただ生産的資本の流通期間を短縮するかぎりでのことである。商人資本は直接には生産期間に作用しないが、この生産期間もやはり産業資本の回転期間にとっての一つの制限になっている。これは商人資本の回転にとっての第 1 の限界である。しかし、第 2 に、再生産的消費によって設けられる限界を別とすれば、この回転は結局は総個人的消費の速度と範囲によって制限されている。なぜならば、商品資本のうち消費財源にはいる部分の全体がこの速度と範囲とによって定まるからである。」²⁾

商業資本の回転は、このように産業資本の回転、したがってまた総再生産過程によって制約されているのであるが、逆にまた産業資本や再生産過程に一定の反作用を及ぼす。すなわち、商業資本の急速な回転は、流通時間を短縮することによって、再生産過程の更新を迅速にし、また、流通時間を短縮することによって流通部面に投下される流通資本を節約し、ひいては資本量の節約を通じて平均利潤率を増大させ、さらに商業資本が最終購買者との間に介在することによって流通過程の停滞や混乱から生じる産業資本の回転の鈍化を緩和しその回転を円滑にする。³⁾

商業資本の運動は単に産業資本の運動形態、 $G-W \cdots P \cdots W' - G'$ のうち、最後の過程である $W' - G$ の自立化した形態にほかならない。したがってその運動は価値も剰余価値も創造しない。商業資本の回転は、その速度がはやまっても、産業資本のように利潤の絶対量を増加させるものではない。しかし、商業資本の回転速度の増大は、流通時間に投下される資本量を節約し、それだけ産業資本を増大させることにより、結果として利潤率を高める作用をす

2) マルクス『資本論』第 3 部 379～380 ページ、大月書店、M・E 全集 25a。

3) 橋本勲、前掲書、65 ページ。

る。商業資本の回転速度が早まると、商業資本の絶対量が減少し、総資本のなかで占める商業資本の相対的割合は低下する。

最後に、商業資本は全体として産業資本との間で平均利潤をめぐって競争関係にある。この点はローゼンベルグは次のように指摘している。「…商業利潤を産業利潤と均等ならしめる仕組はどうか？それは、異なる生産部面の異なる平均利潤率を一般的な平均利潤率に均等化させる仕組と同じである。商業資本の利潤率が18%（平均利潤率…三国）以下であるとすれば商業から産業へ資本が流入するであろう、ところが、その結果として再生産に支障が生ずることとなる、すなわち商業網が縮小して、もはや生産される総商品量を瀟過しえなようになる。産業資本はいずれも購買者—この場合には商人をえようと相互の間で競争し、そのため卸売価格が下落し、ひいては産業利潤の率が下落するようになる。もしまた、商業利潤の率が産業利潤の率よりも高いとする、つまり…18%以上とすると産業から商業に資本の逆流が生じ、そのために生産は縮小し、供給が需要よりもおくれるようになる。購買者としての商人間の競争によって卸売値段は高まり産業利潤が増大し、商業利潤が減少する。産業から商業への資本の流入ならびにその逆流は、産業ならびに商業にたいして一般的利潤率⁴⁾が確立するまで続くであろう。」

次に、商業部門別の回転の問題に移ろう。これまで商業資本を全体として考察したが、商業資本内部での社会的分業の展開は段階別分化あるいは専門別分化という形態をとって進行する。すなわち現実には卸・小売の段階別部門と商品別部門が存在する。これらの段階別あるいは専門別の商業資本の平均回転数は、商品の自然的性質、生産や消費の規模と速度、取引の方法などの事情のちがいで、相違がある。ところで商業部門のちがいによるこうした平均回転数の相違は、総利潤、平均利潤率に影響を与えるわけではなく、1回転あたりの利潤量が平均回転数の大きさに反比例するにすぎない。すなわち「……総資本に比べての商人資本の相対的な大きさを与えられたものと前提すれば、商業部門の相違による回転の相違は、商業資本のものになる総利潤の大きさにも一般的利潤率にも影響しない。商人の利率は、彼が回転させる商品資本の量によってではなく、この回転の媒介のために彼が前貸しする貨幣資本の大きさによって規定されている。……だから、いろいろな商業部門での商人資本の回

4) ローゼンベルグ『資本論注解』第6巻387ページ、梅村二郎訳、開成社。

転数は諸商品の商業価格に直接に影響するのである。商業的な価格追加の大きさ、すなわち、与えられた一資本の商業利潤のうちから個々の商品の生産価格に割り当たる部分の大きさは、いろいろな事業部門にある商人資本の回転数または回転速度に反比例する。⁵⁾すなわち、1回転あたりの利潤量は平均回転数の大きい部門では少なく、反対に平均回転数の小さい部門で大きくなる。また、単位あたりの利潤量が少なくても、回転数が早ければ、利潤率に変化がないのである。「…商業部門の相違による回転期間の相違は、一定の商品資本の一回転であげられる利潤はこの商品資本を回転させる貨幣資本の回転数に反比例するという事に現われる。少い利潤で速い回収 (small profits and quick returns) これはことに小売商人にとっては彼が主義として守る原則として現われるのである。」⁶⁾

ところが、同じ商業部門内での個別商業資本の回転数と利潤との関係は全くことになって現われる。この個別商業資本間の回転数の相違は、商業部門間の回転数の相違のように、商品のちがいや流通段階のちがいによるものではなく、資本の大小、商業技術の優劣、商業立地条件の優劣にもとづくものである。これらの諸条件のちがいにより、同じ商業部門でもAという資本の回転数はその部門の平均回転数よりも多く、Bという資本の回転数は平均回転数よりも低い。Aという資本はこのばあい「超過利潤をあげるなのであって、それはちょうど産業資本家が平均よりも有利な条件で生産する場合に超過利潤をあげるようなものである。競争上やむをえなければ、彼は自分の利潤を平均よりも下げることなしに仲間より安く売ることもできる。」⁷⁾これに対して、Bという資本は平均利潤よりも少い利潤しか受けとることができず、ばあいによっては利潤ばかりでなく、資本そのものを失うことになるのである。従って、個々の商業資本は超過利潤を獲得しようとする努力をかさね、そのためにできるだけ資本の回転を早めようとするのである。

3. 農産物取扱商業資本の回転

資本主義の発展は、産業資本に対する商業資本の比率を減少させるという傾向をもつとはいえ、この資本主義の発展はまた同時にあらゆる生産を商品生産

5) 『資本論』389ページ。

6) 『資本論』392ページ。

7) 『資本論』392ページ。

に転化させ、それにつれて商業資本も増大させる。すなわち、「発展した資本主義的生産様式は以前の状態に比べれば、二重に商人資本に作用する。すなわち同じ量の商品がよりわずかな現実に機能する商人資本の量によって回転させられる。商人資本のより速い回転と、その基礎である再生産過程のより大きな速度とによって、産業資本に対する商人資本の割合が減るのである。他方では資本主義的生産様式の発展につれて、すべての生産が商品生産となり、したがって、すべての生産物が流通担当者の手にはいる……。」¹⁾「資本主義的生産様式の基礎の上ではより大きい商品量が生産されるだけではない。それだけではなく、同量の生産物、たとえば穀物が、より大きい商品量を形成する。すなわち生産物のますます多くが商業にはいつてくる。その結果として、さらにまた商人資本の量が増大するだけでなく、一般に、流通に投ぜられるすべての資本たとえば水運や鉄道や電信などに投ぜられるすべての資本が増大する。」²⁾

従って、工業部門で資本主義的生産が一般的に発展しているにもかかわらずなお小農生産が支配的なばあい、小農生産がますます商品経済にまきこまれていく過程で、農産物を取扱う商業資本の量もますます増大していくであろう。この農産物取扱商業資本の量的増大は、すでに考察したように、その段階分化の進展、すなわち農産物の収集・仲継・分散の各過程における多段階的介入によって、よりいっそう促進されるであろう。ところで、産業資本の商品資本を取扱うのではなく、小生産者としての小農の販売する農産物を取扱う商業資本の回転と競争はいかなる特徴をもっているであろうか。

まず、資本主義的生産様式が発展した条件のもとでも、農業生産のなかでなお小農生産が支配的なばあい、この小農の販売する農産物を取扱う商業資本といえども、資本として平均利潤率をめぐる資本一般の競争にまきこまれざるをえないであろう。この点については、ローゼンベルグは次のように指摘している。「かくて、小商品生産者が販売する価格の一の限界は生産手段およびかれの生活手段の価値に帰着する。他の限界は小商品生産者の商品を取扱う商人の利潤もまた一般的にはその国およびその時代の平均利潤に等しくなければならないことで決定される。もし、彼の利潤が平均率以上であるならば、この部門に資本が流入するであろう。また、利潤がそれ以下であるならば、資本の流出

1) マルクス『資本論』第3部 389～388ページ、大月書店、M・E全集25a。

2) 『資本論』388ページ。

が起るであろう。いずれの場合にも競争はわが商人の利潤を一般的利潤に帰着させるであろう。そこで小生産者が、その商品を商人に売るべき価格は、価値よりも産業資本家が受け取るべき平均利潤だけ低くなければならぬ、そのうえになお流通費も控除されなければならない。というのは、これもまた購買価格と販売価格との差で回収されるべきものだからである。³⁾このように、農産物取扱商業資本といえども発達した資本主義のもとでは、資本一般との競争の中にくみこまれ、平均利潤率の形成に参加するものとみるべきである。農産物取扱商業資本を全体としてみたばあい、その回転を規制する一般的条件は、第1に商品化される農産物の生産と消費の規模と速度である。これはまた商業的農業の進展の程度と農産物の消費者とくに労働者の賃金水準に条件づけられている。第2に、運輸通信施設の発達の程度である。とくに農産物市場のばあい農産物生産と農産物消費の場所的あるいは時間的分離が顕著なため、農産物の流通において運輸通信施設の果す役割が大きい。第3に、これらのいわば外的条件に対して、農産物取扱商業資本内部の専門別あるいは段階別の分業の進展および商業技術そのものの発達の程度である。農産物取扱商業資本の回転は、全体としてこれらの諸条件に規制されている。しかし、これらの諸条件がどの程度進展するかは、資本主義経済の発展程度に基本的に依存している。つぎに農産物の各流通段階での商業資本の回転に示される特質について検討しよう。

農産物を取扱う商業資本の中でもとくに仲継過程にある卸売商業資本は、いはやくその前期的性格から脱皮し資本主義的競争に深くまきこまれざるをえない。なぜならば、農産物を取扱う仲継卸売商業資本は人口の集中する都市に成立するが、いっばんに、そこには産業資本と商業資本も集中するためである。そればかりでなく農産物の仲継過程にある卸売商業資本が、その運動すなわち $G-W-G'$ において、最初の購買過程 $G-W$ で取扱う農産物は、すでに収集過程に介在する商業資本の利潤も含んだ商品資本である。したがって、中継卸売商業資本の農産物の取扱は資本主義的商業資本が産業資本の商品資本を取扱うばあいと共通した性格をもつものとなる。しかし、そのためには農産物市場の全国的な発展を必要とするであろう。

商業的農産物生産と農産物消費の遅れた段階では、農産物市場も地方分散的で、特定の産地の商業資本と特定の消費地の卸売商業資本が、特定の関係で結

3) ローゼンベルグ『資本論註解』開成社、第6巻、403ページ。

ばれている。そこでは取引される農産物は品目的に制限され量的にも制限されている。こうした条件のもとでは卸売商業資本の回転も遅くて停滞的である。しかし、これらの諸制限は商業的農業の展開にともなう農業生産の専門的、地域的分化と都市への人口の集中にともなう農産物消費の量的拡大と質的多様化につれて、克服されざるをえない。農産物市場が拡大し、全国的な広がりを示すにつれて、仲継卸売商業資本の回転を速める条件も進展する。すなわち、こうした条件のもとでは、ある消費地に多くの産地から農産物が入荷されるとともに、逆に、ある産地は多くの消費地に農産物を出荷する。それにつれてすでに指摘したように、仲継卸売市場の形成も進展する。仲継卸売商業資本の平均回転速度は、収集過程にある多くの地域の多数の商業資本の農産物を取扱うばかりでなく、ある収集商業資本から継続的に農産物を集荷することによってはやまるであろう。仲継過程にある卸売商業資本は、このように多数の地域の多数の収集商業資本の販売を集中することにより、資本主義的再生産構造の中に農業生産のように遅れた商品生産をくみこんでいくうえで重要な役割を果すのである。

次に農産物の収集過程にある商業資本は、農産物の生産者と直接結びついてゐるため、その回転も農業生産の性格に直接的に規制されるところが大きい。いっぽんに、1商業資本は数産業資本の回転を行うばかりでなく、1産業資本の数回転も行うことによってその存立の根拠が与えられている。ところが農産物生産は、その自然的条件に制約されて、農業生産者が1年のうち農産物を数多く回転させることは、集約的な畜産あるいは園芸生産を除いては、いっぽんに制限されている。そのため、収集商業資本の存立の根拠はむしろ多数の農業生産者の農産物を集荷するところがおかれている。しかし収集過程にある商業資本といえども、その回転速度を高めるために、収穫期間のことなるちがった種類の農産物を取扱ったり、また、農民の必要とする生活手段や生産手段を取扱っていることはいうまでもない。

商業的農業の遅れた段階では、農業生産者は多くの種類の農産物を生産し、農業生産技術も未発達であり、商品化される農産物も少量でしかもその選別、

4) たとえば、蔬菜生産のばあいには栽培品目が多いばかりでなく、1年のうちに数回にわたる生産が可能である。しかも、その収穫期間が、トマトなどにみられるように時間的の広がりを示して、1収穫期間に数十回の販売が行われる。こうしたことは、養豚や養鶏にも多かれ少かれみられる。

規格、包装が遅れている。農業生産者は農産物の販売を商業資本に全面的に依存する。しかし商業資本は分散的で特定の生産者と結びつき、生産者からの農産物の購買機能ばかりでなく、選別、規格、包装、貯蔵などの諸機能をあわせてもっている。取扱う農産物商品の量は制限され、商業資本の回転は遅いが前期的な取引によって利潤追求をはかる。商業的農業の展開にともない農業生産の専門化と地域分化も進行し、農業生産力が高まり、商品化される農産物の量が増大し、その質的統一化も進展する。それにつれて商業資本の前期的取引は制限され、1生産者から多くの農産物を購入するだけでなく、多数の生産者と取引することにより、その回転速度を高める条件があたえられる。

農産物の分散過程にあって、個人的消費者と結びつく小売商業資本の回転は消費者の集中の程度とその所得水準に強く規制される。都市の発達が遅れ、消費者が分散している条件のもとでは、1小売商と結びつく消費者の数も少なく、零細で兼業的小売商が多い。すなわち、個々の消費財の販売量は極めて零細なので、多数の種数の消費を取扱うことなしにはその営業がなりたない。都市人口の集中は農産物消費の量的拡大と質的多称化を促進し、米穀商、食肉商、青果商など農産物を専門的に取扱う小売商が形成される。専門的小売商は兼業的小売商よりも、特定の種類の農産物を大量かつ恒常的に取扱うことによりその回転速度はいっそう高めることができる。農産物市場がさらに拡大し、これらの専門的小売商が特定の場所に集まって小売業を営むいわゆる小売市場の形成により、その回転はいっそう高まる。これは、仲継卸売商業資本の回転速度の増大と対応して進行する。

こうした農産物の専門的小売商の存立は、農産物商品そのものの規格化が遅れており最終の小売段階においても多かれ少かれ、加工過程を必要とし、小売商の専門的手腕を発揮すべき条件が残されていることにもとづいている。しかし、農産物の収集段階での規格化と標準化が発展し、また食料の多くが加工資本によって加工食品として流通するにつれて、専門的小売商のそうした存立基盤は弱められる。消費者の農産物の購買形態も、所得水準の高まり、貯蔵技術の発達とも関連して従来のように毎日少量づつ買わなくとも、量的にまとめて数日分買うという形に変化する。これらの条件のもとで、農産物を取扱う小売商は、従来の専門的小売商からさらに多くの食糧品を取扱ういわゆる総合食料品店へと発展する。総合食料品店の形成は、資本家の経営としての性格を強め

規格化、標準化された食料を大量に取扱うことにより、その資本の回転はよりいっそう高まる。

以上、農産物取扱商業資本の回転について全体としての特徴と各流通段階ごとの特質およびそれを規制する条件について検討をした。農産物取扱商業資本は各流通段階の平均的な回転速度を前提として、さらに個別的には激しい競争をくり返している。この個別商業資本の競争を通じて、農産物取扱商業資本の集積と集中も進行する。

4. 農産物取扱商業資本の競争と集積・集中

すでに指摘したように、ある段階のある部門の商業資本は、その平均的な回転数をもっている。この平均回転数を形成するものは、ある段階のある部門に属する個別商業資本の個々の回転数である。農産物取扱商業資本についても、収集・仲継・分散の各流通段階ごとに農産物の商品別に平均回転数があり、これが個々の農産物取扱商業資本の競争を通じて形成されている。農産物の流通段階におけるある部門の個別商業資本はその回転数をそれぞれ異にするが、これはたとえば農産物取扱商業資本の大小、その構成のちがひ、個別的分業の進展度、商業労働者の能率の高低、商業の立地条件の差などさまざまな条件のちがひにもとづくものである。この個別商業資本の回転数の相違は、農産物のある流通段階のある部門の商業利潤の分配における差違をもたらし、個別商業資本の利潤拡大にとって重要な意味をもつものである。

すなわち、平均回転数よりも回転数の多い商業資本は平均利潤のほかにも超過利潤を取得するが、平均回転数よりも回転数の少ない商業資本は平均利潤以下の利潤しかえられない。農産物取扱商業資本は、超過利潤の取得をめざして、労働強化などによる商業労働者に対する搾取の強化、店舗の拡充、賃金の引下げその他による売買費用の節約、新しい販売技術の導入などの手段を構じて相互に競争する。結局、これらの諸手段を用いることにより、個別の農産物取扱商業資本は農産物のある流通段階のある部門の平均回転数よりも個別の回転数を高めることによって、超過利潤の取得をはかるのである。

ところで超過利潤は、個別商業資本間で技術が一般化すれば消滅するものである。したがって、超過利潤を取得して優位に立った農産物取扱商業資本は、その超過利潤をさらに維持するために、利潤の資本への転化、すなわち、資本の蓄積をおしすすめる。これによって、農産物取扱商業資本の集積と大規模化

が進行する。しかし、資本の蓄積による大規模化は、超過利潤の取得が一時的であるというばかりでなく、農産物のある流通段階のある部門に配分される利潤も制限されているので、おのずと限界がある。この限界をこえて、農産物取扱商業資本がさらに大規模化をはかるために、商業資本の集中もおこなわれる。すなわち回転速度の早い大規模な農産物取扱商業資本は、みずからの利潤を低めることなしに、弱少な商業資本よりも農産物の販売価格を引き下げることにも可能である。そのため弱小な資本はその市場をうばわれるが、これに対して大規模な商業資本はみずから資本を投下するか、あるいは弱小な資本を吸収合併して、その集積と集中を進める。

農産物取扱商業資本の競争と集積・集中の論理を要約すると以上のごとくであるが、さらにその競争と集積・集中が農産物流通の各段階で示す特徴をみてみよう。資本主義の発展にともなう都市人口の集中は、仲継過程での農産物売買とますます頻繁かつ大量なものとする。農産物市場の拡大により、農産物価格の地域的、時間的、段階的平準化につれて、とくに仲継過程での前期的取引の可能性はいちはやく制限される。仲継卸売商業資本相互間の競争は、それにつれていっそう激しさを増す。従来のように安く買って高く売るという限定された取引関係にある卸売商業資本は競争にまけて、価格の平準化傾向にいちちはやく対応して、農産物単位当りの利潤は少なくとも、その回転率を速め大量の取引ができる方向に転換しえた卸売商業資本の方がその集積・集中と大規模化が進展する。そのためには、たとえば委託売買資本に転化し投下する商業資本のうち商品買取資本、危険負担準備金などは大巾に縮小し、売買操作資本の投下を基礎に農産物の売買を集中する。これによって、相対的に少ない資本でもって大量の農産物を回転させる。しかし、売買操作資本そのもの、たとえば大型の売場施設や新しい販売技術を身につけた商業労働者などはますます限られた大規模な仲継卸売商業資本に集中される。仲継過程にある卸売商業資本はその売買費用を節約し、資本の回転をはやめるために、農産物の収集過程あるいは分散過程にある商業資本の中でもより大規模なものとの結合を強めるが、これも大規模な仲継卸売商業資本ほど可能である。仲継卸売商業資本の集中と大規模化は、収集過程あるいは分散過程にある商業資本の集中を促進する条件である。しかし、収集過程あるいは分散過程における集中は、これらの過程にある商業資本相互の競争にもとづくのである。

農産物市場の展開と商業資本

農産物の収集過程にある商業資本は、商業的農業が遅れていけばいほど分散的とならざるをえない。ここでの商業資本の競争にとってとくに重要な意味をもつのは、農産物の生産者から農産物を買取るための資本の大小と買取った農産物を選別、保管、貯蔵する施設の所有の程度である。これらの施設のより大きなものを所有し、農産物の買取資本を多く使用できる産地商業資本ほど多くの農産物を取扱うことができた。商品化の遅れた小農生産においては、そこで必要とする生産手段や生活手段についても商人からの現物あるいは資金の貸付に依存した。これがたとえば青田売などにみられるように商人が農産物を買集める手段ともなった。しかし、商業的農業の展開にもとづく、農業経営の専門化と主産地形成の展開は、一方ではこれまでのそうした商人と生産者との特定の関係で結ばれた狭い範囲での取引関係をきり崩していくとともに、他方では生産者の組織的まとまりと共同販売を促進する。農産物販売組合の成立と共同販売の展開は、無条件委託販売を原則とするため、商品買取資本の必要なしに仲継過程における卸売商業資本との結合が可能になる。農産物販売組合が農産物の選別、保管、貯蔵施設などをみずから所有することによって共同販売はさらに強化される。農産物販売組合がさらに生産手段の販売と貸付や信用事業をかねるようになる。こうした農産物販売組合の成立と展開は、これまでの収集商業資本の存立基盤を弱めるとともに、これらの間での集中と没落を促進せずにはおかない。

農産物の分散過程における商業資本とくに小売商業資本の競争において重要な意味をもつのは、小売店舗の立地条件、店舗の設備、取引方法、商業労働者の能力などの差であり、これは結局は資本の大小に依存するであろう。すなわちこれらの条件が有利にある小売商ほどその販売量も多く資本の回転率も高いであろう。農産物取扱小売商業資本も相互の競争を通じて、専門的小売商から総合食料品店へ、総合食料品店からさらにチェーンストアへとその規模拡大と集中が進展する。一方ではこうした資本主義的な大経営への展開が示される。しかし、他方では、資本主義経済の発展にもなつてつくりだす相対的過剰人口の存在を基礎に、農産物を取扱う零細な小商人が形成され、これら小商人の間での競争もくりかえされている。

資本主義的再生産構造のなかにくみこまれた農産物取扱商業資本は、以上のごとく農産物の各流通段階ごとに相互に競争し、その集積と集中が進行してい

る。しかし、独占資本主義のもとでは、こうした農産物取扱商業資本の競争と集中はより深刻な形態をとらざるをえない。独占資本の高利潤が確保された条件のもとでは、非独占部門の利潤率は平均利潤率以下に低められる。従って、農産物取扱商業資本の競争はこうして低められた利潤率をめぐって展開する。非独占部門の平均利潤以下の利潤率の低下はそれだけこの部門の資本蓄積を制限するにもかかわらず低められた利潤率のもとで、さらに他の農産物取扱商業との競争にうちかかってその利潤を拡大するためには、やはり積極的に資本の回転を高めようとする。そのためには、相対的により少い資本でもって大量の農産物を回転させる方法がますます必要となる。また独占資本主義のもとでの農産物取扱商業資本の集積と集中は、農産物の流通、加工過程への個別独占資本の進出と支配を容易にする。独占資本は農産物の流通過程で機能している規模の大きい農産物取扱商業資本をみずからの系列下に掌握するために、商業資本の店舗の拡充や新しい販売技術の導入に対する資金融資など積極的な措置を講じる。

さらに国家独占資本主義のもとでは、農産物の各流通段階に介在する商業資本の集積と集中は政策的に推進される。そのばあいも、農産物取扱商業資本が他の農産物取扱商業資本よりも資本の回転速度をはやめ、できるだけ多くの利潤を取得しようとする商業資本相互間の競争の利用を通じて行われる。すなわち、さきにみたように農産物の収集過程では農産物の選別、貯蔵、保管施設の所有が商業資本の競争にとって重要な意義をもつか、これに対しては制度融資による拡充政策がとられ、しかもそれが農協の集荷率の強化の措置として進められる。また、農産物の仲継過程では、中継卸売市場を国家の管理下におき、そこに卸売商業資本を政策的に集中するとともにその排他的権利を保証するという形ですすめる。さらに分散過程にある小売商業資本に対しても、その店舗の拡充や統合のための制度融資が行われている。こうした国家独占資本主義のもとでの農産物取扱商業資本の政策的な集中の促進は、農産物流通の各段階に多数介在する商業資本の合理化と手数料商人化を政策的に補強するものである。

IV 青果物取扱商業資本の変質過程

1. 青果物市場の展開と間屋形態

いっばんに商業資本は資本主義の発展段階に照応して、その性格を異にしている。すなわち、資本主義の発生の期の段階ではいわゆる前期的商業資本として小商品生産を従属させているが、自由主義の段階では、産業資本の商品資本の自立化した形態として平均利潤率の形成に参加し、独占資本主義の段階では、独占資本に従属し、いわゆる手数料商人に転化するものとされている。しかし資本主義の発展は各産業部門で不均等な発展を示すのが特徴であり、とくに工業に対する農業のたち遅れは農業生産における土地所有と土地利用という制限のもとで一般的にみられるところである。この工業に対する農業のたち遅れは日本のように後進資本主義国のばあいは、とくに顕著に現われ、高度に発達した独占資本主義すなわち国家独占資本主義の段階にありながら、その体制のなかに小農生産という遅れた農業部門を包含している。

したがって、独占資本主義のもとで商業資本が手数料商人化するといっても小農生産が支配的なばあい、その小農の販売する農産物を取扱う商業資本についてはいかなるかたちで進行するのか、この問題が本論での中心的課題であった。とくに現在、農産物市場の国家独占資本主義的再編成の過程が、進展しているといわれているが、この過程の進行を農産物取扱商業資本の手数料商人化の論理との関連で解明しようとするのか、ここでの問題意識であった。現在進行しつつある農産物市場の国家独占資本主義的再編成の過程を解明するにあたって、商業資本ならびに農産物取扱商業資本に関するこれまでの理論的成果をふまえて、具体的には青果物取扱商業資本を対象とし、この性格と機能が日本資本主義の発展段階と対応してどのように変質してきたかを実証的に分析した。そのばあい、青果物取扱商業資本の性格と機能の変質過程を青果物取引の諸形態の変遷との関連で分析した。すなわち、青果物の取引形態は、その最も端初的な形態である生産者と消費者との直接的取引形態、これの発展した市場（イチバ）形態、さらに間屋形態、卸売市場形態、これの進化した中央卸売市場形態、さらには大規模収集商業資本と大規模小売商業資本との直接取引形態など商業的青果物生産の発展と青果物市場の拡大に対応して様々の形態をとるが、本論ではこの中でもとくに間屋形態から卸売市場形態への発展さらにはその中

中央卸売市場形態への転化と、中央卸売市場形態そのものの発展の各過程に照応する青果物取扱商業資本の分析に重点を置いた。

資本主義の成立期の商業的青果物生産の未熟な段階では、青果物市場の地方分散性と対応して、青果物の流過程において問屋形態が支配的であった。この問屋形態の形成は封建制度のもとでも、都市への人口の集中を基礎にみられた。城下町などの都市を中心に成立した問屋資本は、封建制度のもとで、一方では様々の封建的規制を受けるが、他方では弱小な生産者と小売商との間にあって前期的商業資本として独立し不等価交換によっていわゆる譲渡利潤の取得をはかっていた。問屋資本は生産者から青果物を委託で受けとり、これを小売商に相対取引で販売していたが、これはのちにみる委託売買資本とその性格を異にするものである。青果物を委託で取引したのは青果物商品の特質から来る危険負担を生産者あるいは小売商に転化するためであった。問屋資本は、資金の貸付などを通じて、特定の生産者と小売商を従属させ小売商への青果物の販売価格および生産者への仕切価格の設定において支配的な役割を果していた。

明治維新による封建制度の崩解により、問屋資本は封建的な規制から解放されたが、生産者と小売商に対する前期的な関係は残された。しかし、資本主義の発展と都市人口の集中は、青果物市場のいっそうの拡大を促進した。青果物市場がなお地方分散的であるとはいえ、消費地市場と産地市場の分離が進行し、産地問屋と消費地問屋が成立した。農村における半封建的地主制のもとでの遅れた商業的農業と結びつく産地問屋および都市における低賃金にもとづく遅れた青果物の消費構造に規制される零細な小売商と結びつく消費地問屋は、青果物の流過程においてなお支配的な地位にあった。これらの問屋資本は貸付資本の性格もかね、生産者および小売商との間では前期的な取引を行い青果物の地域的、時間的価格差をたくみに利用しながらその利潤の拡大をはかった。問屋資本は青果物流通とその価格設定機能において支配力をもったが、それを可能にした条件は、問屋みずからが青果物の選別、包装、保管、貯蔵、運送などいわゆる流過程に延長された生産的諸機能を果す施設を掌握していたためであり、この傾向はとくに産地問屋において明確にあらわれた。

問屋形態は商業的青果物生産と青果物消費の遅れた構造に条件づけられているが、逆に問屋資本の諸機能の強化は商業的青果物生産の発展を促進し、青果物市場の範囲を拡大し、多様化する。商業資本の機能を通じて、生産された青

農産物市場の展開と商業資本

果物のうち、ますます多くの部分が流通に入りこみ青果物の市場領域はいっそう拡大し、それとともに青果物販売における偶然性が次第にとり除かれる。資本主義が産業資本として確立する時期は、都市人口も急激に増大し青果物に対する需要も量的に増大するばかりでよく質的にも多様化する。こうした条件のもとでは、青果物を取扱う卸売商業資本といえども、その前期的取引にもとづく利潤取得は制限され問屋形態の存立基盤が弱められ、卸売市場形態への移行をよぎなくされる。

卸売市場形態が問屋形態に代って成立する一般的条件は、消費地における青果物取扱卸売商業資本が、自由競争のもとでの平均利潤の法則に従わざるをえなくなり、これまでのように安く買って高く売るといった前期的取引による利潤取得では対応できず商業資本相互の競争を通してその利潤の拡大をはかるとすればより積極的に市場を拡大し資本の回転速度を高める以外には方法がなくなるためである。すなわち資本主義のこの段階では、交通、通信、貯蔵技術の発達も進展し、これによって青果物市場の地域的、時間的拡大はいっそう促進され、また、商業的青果物生産の展開と専門的小売商の発展もすすむ。これらの条件は青果物価格の地域的、時間的、段階的平準化をもたらす。この青果物価格の平準化傾向は、これまで青果物の時間的、地域的、段階的価格較差を巧みに利用して利潤の増大をはかっていた問屋資本の存立をますます制限する。

問屋形態から卸売市場形態への移行の過程で、青果物取扱卸売商業資本の性格も変化する。卸売市場形態のもとでは仲継卸売商業資本は委託売買資本となる。卸売市場形態における仲継卸売商業資本は、青果物流通の仲継過程にあってなお自立性をもちうるのは売買操作資本をみずから投下しているからである。

また、商業資本が委託販売資本としてこのように自立しうるのは、商業信用ばかりでなく銀行信用の一般的な発展を前提とする。仲継卸売商業資本はその利潤を売買差益として受取るのではなく、委託した青果物の販売価格に対する一定の割合すなわ手数料という形で支払われる。1定の手数料率を前提に、卸売商業資本がその利潤の拡大をはかるとすれば、より積極的に資本の回転速度を早めようとする。卸売市場形態のもとではせり売りが中心となるが、この方法は、現物取引を必要とする青果物の大量でかつ迅速な取引にもっとも適したものだからである。委託売買資本として自立化することにより、仲継過程への青果物売買はいっそう集中する。青果物流通の特質である青果物需要の分散性

と青果物供給の分散性、青果物需要の恒常性と青果物供給の季節性は、仲継過程における卸売商業資本の需給調節と価格設定機能によって統一される。しかし、委託売買資本としてせり売を採用することにより、青果物の価格実現にもなう危険負担は青果問屋のばあいよりも縮小し、収集過程あるいは分散過程にある商業資本に転化される。

卸売市場形態の発展は、仲継過程への青果物流通の集中を基礎に青果物の収集過程と分散過程にも大きく影響する。仲継過程で設定される価格は青果物の生産者価格を規制し、これをめぐって青果物生産者相互間あるいは産地間の競争はいっそう強化され、商業的青果物生産はいっそう促進される。他方、仲継過程での青果物売買の集中は、小売商の専門化ばかりでなくその集中化も促進する。日本のばあい、明治末期から大正初期にかけて資本主義が急速に発展し、都市への人口の集中も顕著にすすみ、青果物市場における卸売市場形態への移行の方向もみられた。しかし、なお、青果物消費の遅れた構造と半封建的地主制に規制された商業的青果物生産の遅れた構造は、青果物の流通過程における問屋支配の形態を一般的なものとして、仲継卸売商業資本の成立を未熟なものにした。したがって、日本のばあい、産業資本の確立が急速に独占資本に転化するという条件のもとで、青果物取扱商業資本が近代的商業資本として自立しえないままに、独占資本主義のもとでの商業資本の合理化の方向をよぎなくされるという特質をもつものとなった。

2. 青果物市場の編成と商業資本

独占資本主義のもとで、独占資本による商業資本の合理化と手数料商人化が進行するといつも、青果物のように小農の販売する商品を取扱う商業部門への独占資本の直接的支配の確立は困難である。青果物の流通過程において収集、仲継、分散の複雑な過程を必要とし、しかも現物取引を必要とするなどの諸条件は、商業資本の独自の活動を必要とする。すなわち、青果物の売買取引が大規模化されたとしても、それによる流通費用の節約はなお商業資本に依存しなければならず、また、生産の分散性と消費の分散性に規制される青果物需給の調節作用も商業資本の活動を必要とし、さらに青果物商品の標準化、単純化も進まないままその使用価値的制限がつよく残存しているところでは、商業資本の専門的手腕を発揮すべき領域がまだ強く残されており、独占資本主義のもと

でも青果物流通の各過程に商業資本が多数存立する条件が与えられているのである。

しかし、独占資本の支配する経済体制のもとでは、すでに独占資本による高利潤が確保されているという前提のもとで、青果物を取扱う商業資本の利潤はこれらの資本間の競争を通して平均利潤以下に制限されていかざるをえない。さらに、資本主義の諸矛盾がますます深刻化する独占資本主義のもとでは独占資本の高利潤とその支配体制を維持するために、いっばんに農産物市場に対する国家の介入が強化される。第1次大戦を経過する時期は、日本資本主義が急速に独占資本主義の体制を強化した時期であり、都市人口のいっそうの集中と、食料需要の急速な増大も進展した。しかし、日本資本主義の構造的特質である低賃金構造と農村における半封建的地主制の支配は、農産物市場の発達と商業的農業の展開をきわめて緩慢なものとした。こうした条件のもとで第1次大戦を契機とする食料農産物価格の極端な騰貴はついに米騒動を勃発させた。これを契機に農産物市場に対する国家の介入が強化された。すなわち、日本人の主食である米穀取引に対しては米穀法が制定され、副食である生鮮食料品の流通に対しては中央卸売市場法が制定された。

中央卸売市場法にもとづいて、大都市を中心に中央卸売市場が設立されたがこれによって従来の青果物の流通過程においてなお前期的な性格を強く残していた商業資本は大きく編成替されるところとなった。

中央卸売市場への仲継卸売商業資本の収容の過程で、多数の消費地問屋の集中がはかられ、これによって青果物売買も集中した。中央卸売市場における仲継卸売商業資本は卸売市場形態における卸売商業資本と同様に委託買資本としての共通の性格を有する。しかし、卸売市場形態においては、その自立性の基礎となっていた売買操作資本のうち建物等への投資は公共投資となっているため、売買労働と売買手段の一部に制限される。中央卸売市場に制度的に収容された仲継卸売商業資本は、たとえば取引品目の制限、場外取引の禁止、買付品に対する規制、手数料率の制定など、その活動は大きく制限されている。すなわち、仲継卸売商業資本は独占資本主義のもとで、国家の制度的規制のもとにおかれた委託売買資本であり、商業資本の合理化と手数料商人化の方向を政策を通して進められた形態であるといえよう。しかし、他面では、仲継卸売商業資本は保証金を積み立て、取得する手数料のうちから一定の施設使用料の負担な

どにより中央卸売市場の施設を利用して商業を営む排他的権利が与えられる。仲継卸売商業資本は、与えられた手数料率を前提に、その利潤拡大を計るとすればせり取引によって青果物の取扱量をいっそう拡大しようとする。すなわち、仲継卸売商業資本は、商業資本のうち商品買取資本はもちろんのこと、売買資本のうち建物などの施設費も節約し、さらに危険負担準備金も節約して、相対的にますます少ない資本でもって大量の青果物を流通させるのである。こうした仲継卸売商業資本の機能を通して、中央卸売市場への青果物流通の集中が進展する。この中央卸売市場への青果物流通の集中を基礎に青果物の社会的需給の調節と一定の市場圏内における市場価格の設定という社会的機能も果すのである。

これまでの遅れた青果物の流通形態を編成替して公設の中央卸売市場が成立したことは、青果物の収集過程あるいは分散過程における商業資本の存立にも大きな影響を与えずにはおかなかった。従来消費や問屋に代って仲継卸売商業資本が成立したことは、収集過程での商業資本の前期的な取引の条件をほりくずす作用をした。すなわち仲継卸売商業資本の大量かつ迅速な取引のためには青果物の取引単位の大規模化と継続的な入荷が必要とされ、せり取引に対応するためには青果物の規格化と標準化が必要となった。また消費地までの取引がこれまでの相対取引に代ってせり取引となり、そこでの価格が公表された。この市場価格は産地の移出問屋ばかりでなく、青果物生産者も知ることができるようになった。これらの変化は青果物の収集過程における取引関係に二重に影響を与えた。すなわち、一方ではこれまで生産者からの青果物の集荷過程、その選別、規格、貯蔵過程、消費地問屋への出荷過程で独自機能を果し、前期的取引が可能であった産地問屋が従来のような取引では対応できなくなったこと他方ではこうした産地問屋の前期的な取引に対抗して、みずから出荷組合を組織して、直接消費地の仲継卸売商業資本と結びつく体制ができあがってきたことである。こうした青果物の収集過程における編成替の方向は、従来産地問屋の前期的取引を制限するという限りでは積極的意義をもつものであった。しかし、この編成替は同時に独占資本主義のもとでの商業資本の合理化の方向と対応したものであり、出荷組合の形成、その規模拡大、仲継卸売商業資本との結合強化も、結局こうした合理化と対応した姿であり、青果物生産者の利益と直接結びつくものとはなりえなかった。この過程での編成替の方向がたとえ

ば帝国農会による青果物出荷組合の育成強化にみられるように、政策的に推進された。

中央卸売市場の形成にみられた青果物流通の編成替の方向は、青果物の分散過程にもみられた。都市への人口の集中と青果物消費の量的拡大と質的多様化につれて、青果物取扱小売商の専門化も進展したが、この傾向が強まるにつれて従来の消費地問屋に対する小売商の従属関係もしだいにくずれ、神田市場における歩戻問題にみられたように、小売商の組織的まとまりと問屋資本に対する抵抗も強化された。こうした小売商の自立化の方向は中央卸売市場が形成されるにつれていっそう強化された。中央卸売市場の成立とそこでの仲継卸売商業資本の青果物の迅速な取引に対応して、専門的小売商の対応も変化し、小売市場の形成が一般化する。小売市場においてはかつての問屋に従属した小売商のばあいとことなり、掛売の減少と正札現金売の増大、配達、御用聞きの減少と小売商の店先販売の増大など、小売商の取引方法も変化する。これは中央卸売市場での青果物取引と代金決済の迅速化、せり取引にともなう日々の価格変動に対する小売商の対応を示すものであった。小売商の存在を近代化するための措置は、やはり米騒動にともなう物価問題を契機に政策的にも推進された。公設小売市場の設立が、政府の融資制度のもとで、全国の主な都市ですすめられた。しかし、この段階では、小売商の大多数が専門化したとはいえ家族労働を中心とする小営業であった。したがって、大都市においては、中央卸売市場の設立にあたって、大規模化した仲継卸売商業資本とこれら零細な小売商との間に分散卸売商業資本を介在させ、これを仲買人制度として中央卸売市場の中に包摂したことはいうまでもない。

以上の如く青果物流通の仲継過程に対する市場編成は、青果物の収集過程および分散過程における編成をともなって進行した。この編成政策は、昭和恐慌による資本主義の体制的危機のいっそうの深化という条件のもとで、国家独占資本主義の体制が強化される過程でいっそう強められていった。しかし、日華事変から第2次世界大戦へと日本経済が戦時統制経済に移行する過程で、青果物取扱商業資本もその独自の諸機能はいちぢるしく制限されていった。すなわち昭和15年の「青果物統制規則」をはじめとする一連の統制措置により、公定価格の設定と、配給統制、せり売の禁止、仲買人制度の廃止、卸売人の合併と公社化などが実施され、中央卸売市場はその機能を完全に失うに至った。青果物

流通の各過程に介在する商業資本は、戦時国家独占資本主義のもとで、青果物価格の設定機能も青果物需給の調節機能もうばわれ、青果物の単なる配給機能を果すものとして事実上の手数料商人に転化した。しかし、ここでの商業資本に対する国家統制と手数料商人化は、戦時国家独占資本主義のもとで、商業的青果物生産の展開と青果物市場の発展を強権的に抑圧する過程で実施されたものであり、このことじたい青果物の流通問題をいっそう深刻化せしめずにはおかなかったのである。

第2次大戦後の日本資本主義の復活強化と農地改革以降の商業的青果物生産の展開という条件のもとで、青果物流通に対する統制経済も解除され、中央卸売市場制度が復活した。戦後日本資本主義の構造的変化は、青果物の流通形態において卸売市場形態を支配的なものにした。それは、まず現在の大都市における中央卸売市場がますますその仲継市場として機能を深めていったことに示される。また地方中都市にも中央卸売市場が開設され、そこでの機能が強められた。さらに、地方中小都市においても、いわゆる地方卸売市場が広汎に形成されていった。このように卸売市場形態を一般化した条件は、まず、農地改革により半封建的土地所有制度が崩解し、商業的青果物生産が顕著に進展したことである。また、青果物の消費構造も変化し、それが高度化し、多様化していった。青果物市場は大都市中心の発展ばかりでなく、地方都市にも、さらには農漁村地帯にも拡大した。青果物市場の地域的・時間的拡大は、青果物価格の地域的、時間的、段階別の平準化を促進した。これらの諸条件は、青果物の流通過程における商業資本の前期的取引の可能性をますます弱め、都市における卸売市場の形成とこれと産地における青果物の組織的販売体制との結合を強めることとなった。戦後のこうした展開は、すでに戦前段階にみられた青果物編成の方向を全面的に発展させたものである。しかし、これによって、青果物の流通過程に介在する商業資本はけっして、その自由な活動が許されているわけではない。むしろ、戦後のあらたな形態をとって強化しつつある国家独占資本主義の体制のなかに、それらの商業資本といえども大きく組みこまれてゆき、その合理化と再編成をよぎなくされているのである。

3. 青果物市場の再編成と商業資本

昭和30年以降の独占資本の強蓄積の過程で、青果物の流通過程に介在する商業資本に対する国家独占資本主義的な政策介入が強化されつつあるが、それは

とくに青果物流通において中心的機能を果している中央卸売市場にむけられている。これは青果物流通のように独占資本の直接的掌握が困難な分野に対しても、独占資本はその高利潤と支配体制を維持するために、青果物の流通過程に介入する商業資本の政策的な集中と合理化を推進することにより独占資本主義のもとでの商業資本の一般的な形態である手数料商人化をより強力におしすすめようとするものにほかならない。しかし、こうした政策的介入も、青果物の流通過程で現実に機能している商業資本の運動すなわち $G-W-G'$ を前提とし、これを利用してはじめて可能となるのである。

中央卸売市場における仲継卸売商業資本は、制度的規制を受けた委託売買資本として、現在積極的にその機能を強めている。仲継卸売商業資本は、制度的に与えられた手数料率しかもそれが引き下げられるという条件のもとで、その利潤追求をめざして、営業費比率を低下させ、取扱金額を増大させ、資本の回転速度を早めるために積極的に活動している。中央卸売市場への青果物流通の集中とそこでの仲継卸売商業資本じたいの集積、集中は、中央卸売市場があらたに設立されその過程で卸売商業資本が統合されるというばかりでなく、そうした仲継卸売商業資本の利潤拡大をめざした積極的な活動にもとづいている。また、仲継卸売商業資本はその資本の回転速度をはやめるために、青果物の収集過程あるいは分散過程で機能する商業資本の合理化と大型化を促進するとともに、そこで雇傭される商業労働者の作業能率を高めつつある。仲継卸売商業資本の集積、集中と機能強化は、中央卸売市場設備の整備、拡充、卸売人の手数料率の引き下げ、交付金に対する制限、仲買人の集中合併の促進など国家による一連の合理化政策によって補強されている。

中央卸売市場への青果物流通の集中とそこでの仲継卸売商業資本の諸機能の強化は、同じく青果物の仲継段階にある地方市場における卸売商業資本の競争を激化させ、その再編成を促進せずにはおかない。すなわち、大都市における青果物流通の集中を基礎に設定される中央卸売市場での市場価格は、地方市場での価格形成の基準となり、それを規制する。また、中央卸売市場での青果物の迅速な取引は、地方での卸売商業資本の取引にも影響し、そこでの代金決済の速度をはやめずにはおかない。さらに、中央卸売市場での手数料率の引下げに応じて同じく地方市場での卸売商業資本に対しても産地の移出商あるいは出荷団体からその引き下げが要求され、地方の卸売商業資本は従来と同じ取扱規

模では利益率が低下せざるをえない。かくして、地方市場における卸売商業資本相互間の競争はいっそう激化し、そこでの統廃合が進行する。また、こうした地方市場における卸売商業資本の集中と合併は政策的にもすすめられる。それは、たとえば地方中都市における中央卸売市場の設立あるいは、そこまでいかなくとも市営市場の設立という形態で進行している。また、地方卸売市場設備の拡充のための制度融資や代金決済の迅速化を促進する資金の融通も行われている。こうした地方市場における卸売市場の合理化の進展はいまなお青果物の遅れた生産や消費の状態を条件に残存している問屋形態や朝市での取引の存立基盤を弱め、卸売市場形態への移行を促進している。

限られた手数料率のもとでの仲継卸売商業資本相互間の競争は、資本の回転速度の増大を追求させ、青果物の取扱数量の拡大を促進する。青果物の取扱数量の増大は、仲継卸売商業資本がある品目の青果物について多数の荷主と取引するだけでなく、1荷主から多数の品目で多量の青果物を集荷することによって可能となるところで仲継卸売商業資本にとって荷主の数の増大といっても、それが零細な荷主であるばあい、営業費用の相対的増大となるため必ずしも望むところではない。むしろ積極的に取引単位の大きい継続的集荷の可能な大規模な荷主と結合しようとしており、げんに大都市における大規模な仲継卸売商業資本は共販体制の確立した大型の出荷団体との結合を強めている。青果物の収集過程における合理化を促進し大型の出荷団体と大規模仲継卸売商業資本との結合を強化させようとする方向は、政策的にも推進されている。たとえば、卸売人の手数料率の引下げにともなう荷主交付金に対する規模別交付率の設定、構造改善事業による大型選果貯蔵施設の設置、農協合併の促進、野菜生産出荷安定制度などの施策は、青果物の収集過程における出荷団体相互間の競争を利用してすすめられている。これらの展開のなかで、いまなおりんご、玉ねぎなど投機的な取引の可能な青果物においては産地移出商の存立条件が残されているが、しかし、産地移出商といえどもますます相互の競争が激しくなり、銀行資本への依存を強めるとともに、消費地の仲継卸売商業資本に対する産地仲買人としての地位に低下しつつある。

仲継卸売商業資本は青果物の分散過程においても、その経営合理化をはかるため、より大規模で取引単位の大きい仲買人あるいは小売商との取引を望もうとする。ますます大量でかつ迅速な取引の進展に対して、弱小な仲買人や小売

商ではその対応が困難となり、これらの分散過程にある商業資本の競争と集中も進展する。青果物取扱小売商の集中は専門的小売商から総合食料品店さらにはスーパー・マーケットへと展開し、この過程で従来の家族経営に代って資本主義的経営への進展がみられる。大規模小売商業の形成は、中央卸売市場での仲買人を介しての取引との矛盾を深めつつある。仲継卸売商業資本の集中化と大規模小売商の発達との間にあつて分散卸売商業資本の競争はいっそう深刻さをましている。青果物の分散過程に介在する小売商業資本に対する合理化と集中化をすすめる政策は、中小企業「近代化」政策の一環として、ボラタリー・チェーン計画にみられるように、強化されつつある。また、仲買人に対しても整理対象とする仲買人に対して資金の融通を制限するなど、その整理、合併政策が強力に推進されている。小売商業資本の集中が、多数の店舗を各地に所有し、みずからも集荷機能を果しうるような大型スーパー・マーケットのばあいは、中央卸売市場の存立条件を崩すものであるが、すでにその方向がみられはじめたことは注目される。

以上、青果物流通の収集、仲継、分散の各過程においてその再編成が進行しつつある。すでにみたように戦前段階においても、独占資本主義のもとで、従来の遅れた前期的取引関係を強くもっていた青果物の流通構造を政策的に編成替し、その近代化をすすめる方向がとられた。現在すすめられている再編成の方向は、そうした特質をともなっているとはいえ、その基本的性格はすでに近代化の進行した商業資本まで含めて、そこでの競争を積極的に利用して、その合理化と手数料商人化を推進するものであり、青果物市場の再編成という意義もまさにそこにあるといえよう。

ところで、現在の中央卸売市場への青果物流通の集中と仲継卸売商業資本の規模拡大と諸機能の強化を中心とするこうした再編成の展開は、その進行の過程であらたな矛盾をともなっていることは注目しなければならない。すなわち仲継過程への青果物流通の集中と対応して展開する青果物の収集過程における青果物販売組合の規模拡大と青果物の規格化標準化の進展とともにすすむ分散過程における大規模小売商業資本の発展は、中央卸売市場での青果物取引においてこれまで結合していた青果物の価格設定の機能と現物流通の機能とを分離する可能性をもたらしていることである。こうした条件のもとで大規模小売商業資本と大規模な農産物販売組合との直接的取引を可能にしている、現在、事

例的にみられる青果物の集配センターの形成はまさにその具体的な現れといえよう。また、中央卸売市場への青果物流通の集中と対応してすすむ青果物の貯蔵加工設備の拡充と青果物の規格化の進展は、青果物の流通、貯蔵、加工過程への独占資本の進出を容易にし、仲継卸売商業資本はそれに従属し、設定された価格のもとで単なる販売機能を担当するものに転化する可能性を含むものである。青果物のばあいこの点はいまだ明確な形では進んでいないが、冷凍魚の流通などでは明白にみられるところである。新卸売市場法の成立にみられるように、現在、中央卸売市場ばかりでなく、地方卸売市場をも含めて生鮮食料品の流通機構を強力に再編成しようとするねらいも、単にこれまでのように流通過程で機能する商業資本の合理化と手数料商人化をすすめるということにとどまらず、生鮮食料品の流通過程への独占資本の進出と支配を推進しようとするものである。

4. 青果物市場再編成政策の性格

国家独占資本主義のもとでとられる農産物市場政策は、それがとられる時期と対象農産物によってちがった形態をとって現れる。しかし、その共通した特質は、まず農産物の流過程に介在する商業資本、なかんずく仲継過程にある卸売商業資本の農産物価格設定機能に国家が介入し、独占資本の高利潤を確保するために、低農産物価格と低賃金の体制を維持することにある。また、農産物流通の特質からくる収集、仲継、分散の各過程に介在する商業資本に対する独占資本の直接的掌握が困難なばあい、国家の制度を通じて、商業資本の節約と手数料商人化を推進することである。さらに、独占資本主義のもとで深刻化する農産物の市場問題、価格問題からくる社会不安を緩和し、その体制的危機を未然に防止することにある。戦後、日本の農産物市場政策の展開は、さらにまた国家独占資本主義の対米従属的性格から、農産物輸入を積極的に推進するという役割を担っている。さらに昭和35年以降のいわゆる高度経済成長政策のもとでは、農産物市場政策は労働力流動化をねらいとする構造政策と密接に結びついて展開するという特徴をもっている。

現在、進行しつつある青果物市場に対する再編成政策も基本的にはそうした特質をもつものといえよう。とくに昭和35年以降の消費者物価の上昇過程において、生鮮食料品の値上りが顕著であったことから、生鮮食料品の流通機構合理化政策は、たえず、物価対策の中でも重要な課題としてとりあげられてき

た。ところで、この流通機構の合理化政策をすすめても物価問題の解決とはならないことは、昭和35年以降の合理化政策が強化された時期にこそとくに消費者物価の値上がりが激しく、その生産者価格との較差をますます拡大していったことから明らかである。この間、物価対策と称されてとられた青果物の流通機構の合理化政策は、すでに明らかにしたように、青果物の流通過程に介在する商業資本に対してその競争を利用した集中化政策にはかならなかった。それは中央卸売市場、地方卸売市場含めて仲継過程にある卸売商業資本のみならず、分散過程にある仲買人、小売商の合併と大型化、さらには収集過程における零細商業の排除と農協の育成、さらには農協合併の促進など現在青果物流通の各過程に対して全面的に強化されている。

こうした青果物流通の全面的な合理化政策は国家の制度を通じて流通過程に介在する商業資本の節約と商業利潤の制限をはかるものであり、これによって青果物取扱商業資本の手数料商人化を積極的に推進しようとするものであり、さらに青果物の流通過程に介在する零細な商業資本の排除とこの部門からの労働流出までねらったものといえよう。この流通機構の合理化政策の推進によって、青果物の流通費用の中で、純粋な流通費や商業利潤の相対的低下は進行するであろう。しかし、このことによって、流通費用の総額は必ずしも低下するとは限らず、むしろ増加する傾向すらみられるのである。合理化政策の展開にともなう近代化した設備の拡充は、青果物の流通費の中での物的な流通費用をますます大きいものにするであろう。とくに、青果物の流通・加工過程に独占資本が進出し、それらの流通・加工施設を掌握したばあいは、独占資本は、青果物の価格設定機能にまで深く関与するであろう。したがって、青果物の流通機構合理化政策の展開は、青果物の消費者価格の低下には直接むすびつくものではない。それは、むしろ青果物の流通過程に介在する商業資本の合理化をすすめることによって、そこへの独占資本の進出を容易にしうるものといえよう。

また、青果物市場の再編成政策の展開によって、青果物の流通過程に介在する商業資本の合理化を進めるといっても、これによって零細で弱小な青果物取扱商業資本の存在を否定しうるものではない。たしかに、青果物の流通過程の中でもとくに仲継過程にある卸売商業資本のばあいは、国家の制度のもとでその手数料率や取引方法が制限されているとはいえ、同時にその排他的権利も与

えられており、委託売買資本として、青果物売買の集中を基礎にその資本蓄積をつづけている。しかし、これに対して大多数の零細な卸売商業資本は、系列化されるかあるいは排除される傾向にあるとはいえ、青果物市場の地方分散性、青果物生産と青果物消費の遅れた構造をもとにして、様々の形態で存続している。さらに、仲経過程にある卸売商業資本の制度的集中が計られたとしても、零細な消費と零細な生産と結びつく青果物の分散あるいは収集の過程にはなお零細な商業資本が広汎に存在している。しかも、国家独占資本主義のもとで強力に推進される産業合理化は、相対的過剰人口の累績をもたらし、これが青果物の流過程における零細な商業資本の介在と存続を可能にする一般的条件となっている。したがって、国家独占資本主義のもとでとられる青果物市場再編成政策は、青果物の流過程に介在する多数の零細な商業資本の存続と競争を排除しうるものではなく、むしろ独占支配のもとでこれら零細な青果物取扱商業資本の競争はさらに深刻で熾烈なものとなるであろう。